

様式第 11 号

博士論文審査結果報告書

令和 5 年 1 月 20 日

神奈川県立保健福祉大学大学院
保健福祉学研究科長 殿

博士論文審査員

主査 新保 幸男
副査 榊 恵子
副査 谷口 千絵

博士論文審査及び最終試験の結果について、次のとおり報告します。

申請者氏名	杉山 いずみ	学籍番号	62020003
論文題目	生活介護事業所における集団活動が 重症心身障害者の意味のある作業となる支援		
審査年月日	令和 5 年 1 月 12 日		
論文審査及び 最終試験結果	<div>合格</div> ・ 不合格		
添付書類	1 博士論文審査及び最終試験の結果の要旨（様式第 12 号） 2 論文の要旨（様式第 8 号）		

博士論文審査及び最終試験の結果の要旨

氏 名	杉山 めぐみ
論文題目	生活介護事業所における集団活動が 重症心身障害者の意味のある作業となる支援
論文審査員	主 査 新保 幸男
	副 査 榊 恵子
	副 査 谷口 千絵
<p>【論文審査の結果の要旨】</p> <p>本研究は、生活介護事業所の集団活動が、重症者にとって意味のある作業となるために、重症者への支援について、作業療法士（以下、OT）と生活支援員および看護師がともに考え実践することによる効果を検討することである。本研究は、3 つの研究及び総合考察で構成されている。</p> <p>研究 1 生活介護事業所における利用者の日中活動への参加の実態</p> <p>利用者を作業参加の視点で分類し、作業参加の特徴に合わせた支援の方向性を検討した研究である。方法は、利用者 17 名に人間作業モデルスクリーニング（以下、MOHOST）を実施し、MOHOST の下位項目の合計得点を用いて、クラスター分析で利用者を分類した。そして、分類された利用者の作業参加の特徴と介入方針を事例から検討した。結果は、利用者は 3 群（A 群、B 群、C 群）に類型化された。各群の事例より、A 群は受け身的な作業参加、B 群は傍観的な作業参加、C 群は作業参加していなかった。介入方針として、A 群は新たな役割の創出や更なる挑戦により自己効力を向上させる、B 群は探索から有能感・達成感を導き出す、C 群は感覚欲求を満たして探索を促す。そして、B 群と C 群に含まれている重症者が、安心して探索できるよう介入することが示唆された。</p> <p>研究 2 生活介護事業所における生活支援員の重症心身障害者に対する集団活動支援</p> <p>集団活動における生活支援員が行う重症者への関わりから、重症者への支援の内容を解明し、重症者への集団活動支援について検討した研究である。方法は、集団活動での生活支援員が行う、重症者への関わりを撮影して、観察データを逐語録に起こした。そして、生活支援員の重症者への関わりを、SCAT（Steps for Coding and Theorization）で分析した。結果は、重症者への集団活動支援の構成概念は 44、サブカテゴリーは 15、カテゴリーは 4 つ生成した。カテゴリーは、【集団活動参加の誘い】【共同で行う集団活動】【良好な関係の維持】</p>	

【表現の尊重】とした。そして、生活支援員の支援には、重症者の意志への働きかけが不十分であることが示唆された。そこで生活支援員と協業して、重症者の反応に合わせた支援、重症者との楽しみの共有、重症者の興味に沿った集団活動の提供、重症者の反応への応答を、支援に取り入れる必要があると考えられた。

研究 3 重症心身障害者に対する集団活動支援を提供する取り組みによる生活支援員と看護師の意識の変化

OT と生活支援員および看護師がともに、重症者に対する集団活動支援における現場の課題と支援の方策を考えて実践することによる、生活支援員と看護師の意識や支援の変化を明らかにした研究である。本研究から明らかになったことは、生活支援員と看護師が、重症者が楽しめることを実感することが、支援の達成感に繋がり、支援の自信になることであった。それを可能にしたのは、①重症者と一緒に集団活動を行うことが共通の認識になり、安心して支援ができるようになったこと、②立場や専門性が異なる生活支援員と看護師に対して、教えるのではなく活動参加記録の記載を通して、重症者の反応に気づき、その違いが判るようになったことで、自ら重症者を楽しませる支援に変化したことが考察される。

総合考察

重症者の意味のある作業となる集団活動は、重症者が安心して、対象物や人と関わり、何かしらの行為を楽しめることである。そして、生活支援員と看護師が、ゆとりを持って、重症者の反応に気づきその違いが判ることで、重症者が楽しめる支援が行われることであった。また、生活支援員と看護師の変化をもたらした OT の関わりは、職種による支援の視点の違いを理解して、生活支援員と看護師の支援の思いを共有し、主体性を尊重したことであった。そして、生活支援員と看護師が、重症者に対する思いや自身の支援を振り返る機会を、意図的に設定したことがストレスや感情を緩和することになった。このように OT の関わりは、重症者の支援という、生活支援員と看護師の作業を変化させた関わりであると考えられる。

以上 3 つの研究及び総合考察により、生活介護事業所の重症者に対する集団活動が、重症者にとって意味のある作業となるための支援を、作業療法士と職員がともに取り組むことによる職員の意識と支援の変化について丁寧に明らかにされており、研究目的が十分に達成されている。また、重症心身障害者自身を利用者主体として明確に位置づけると共に、異なる専門職間における共通認識の取り方などについての丁寧に検討した本研究は保健福祉学に多大な貢献をもたらさうるものである。

以上により、論文審査員 3 名全員が一致して、博士学位論文としての水準を十分に満たしていると判定した。

【最終試験の結果の要旨】

博士論文審査および最終試験は、令和 5 年 1 月 12 日 10 時 40 分から実施した。最初に、申請者の大学院生より「生活介護事業所における集団活動が重症心身障害者の意味のある作業となる支援」の研究概要に関する約 25 分間のプレゼンテーションがあり、その後、主査 1 名、副査 2 名により、約 40 分間の口頭試問を行った。

口頭試問では、研究背景、研究デザイン、データ分析方法と結果の解釈、研究の限界と今後の課題、研究の発展可能性、用語や図表の適切性、論文の一貫性等について質問がなされた。申請者は質問に対して、全体的確、誠実に回答し、さらに研究結果の解釈や発展可能性について、臨床経験や研究プロセスで得た知見に基づき、幅広い視点からご自身の見解を明確に述べていた。

特に、重症心身障害者自身を利用者主体として明確に位置づけると共に、異なる専門職間における共通認識の取り方などについて丁寧かつ明確に回答されている様子からは、当該領域における実践者・研究者としての両面における優れた資質をお持ちであることを感じた。また、研究の継続および研究成果の還元に意欲的に取り組む姿勢がみられた。このため、保健福祉学の学位を取得する者として大いに期待できる人材であると判断させていただいた。

以上をもって、論文審査員 3 名全員が一致して、最終試験を合格とした。